

転移病変に対しリン酸トセラニブの投与を行った
組織球性肉腫の犬の1症例田川道人^{1),2)†} 新坊弦也³⁾ 富張瑞樹⁴⁾ 渡邊謙一⁵⁾ 古林与志安⁵⁾

- 1) 帯広畜産大学動物医療センター (〒080-8555 帯広市稲田町西2線11)
- 2) 岡山理科大学獣医学部獣医保健看護学科 (〒794-8555 今治市いこいの丘1-3)
- 3) 北海道大学動物病院 (〒060-0818 札幌市北区北18条西9)
- 4) 大阪公立大学獣医学部獣医学科 (〒598-8531 泉佐野市りんくう往来北1-58)
- 5) 帯広畜産大学基礎獣医学研究部門 (〒080-8555 帯広市稲田町西2線11)

(2022年12月8日受付・2023年4月6日受理・2023年8月25日公開)



本文はこちら
https://www.jstage.jst.go.jp/article/jvma/76/8/76_e202/_article-char/ja

要 約

症例は8歳4カ月のバーニーズ・マウンテンドッグ、去勢雄であり、肺腫瘍の精査を目的に帯広畜産大学動物医療センターを紹介受診した。切除組織の病理学的検査にて肺原発の組織球性肉腫と診断し、第36病日よりロムスチンによる術後抗がん剤治療を行った。ロムスチン5回目投与時に右兼部に5cm大の皮下腫瘤を認め、細胞診にて組織球性肉腫の転移病変と診断した。ドキソルビシンを使用した効果がみられず病変は11cm大まで増大した。第172病日よりリン酸トセラニブの投与を開始したところ転移病変は急速に退縮し1.5cm大まで縮小した。しかし第301病日に転移病変の再増大と胸水貯留を認め、ビンクリスチンを投与するも反応なく第318病日に斃死した。一時的ではあったものの、リン酸トセラニブの劇的な効果がみられた稀な症例と思われた。

—キーワード：犬，組織球性肉腫，転移病変，リン酸トセラニブ。

-----日獣会誌 76, e202~e207 (2023)